

## 乱暴な行動をとりやすい子どもとつきあう

毎日出会う子どもたち。いつも笑顔で楽しく過ごせばいいのですが、中には、気に入らないことがあると、すぐに周囲に突っかかっていたり、自分の思いを通そうとして、乱暴な行動をとる子はいませんか。そうした行動がみられると、周りの子どもたちも困りますし、巡り巡って、その子自身もクラスの中で浮いてしまったり、避けられたりして、自分にとっても残念なことになりかねません。

そうした子どもを気にかけて、こちらから話しかけても、なかなか心を開いてくれなかったり、反発するばかりで、どう関わっていったらいいのか迷ったり、そんな子どもを受け容れることが難しい気持ちになってしまうことがありますか。

でも、そんな子どもの特徴を踏まえた関わりを続けていくことで、だんだんと子どもとの関係も変わってくるように思われます。乱暴な行動をとりやすい子どもとどうつきあっていくか、「京のせんせい知恵袋」からヒントになることを紹介しましょう。



### ○乱暴な行動をとりやすい子どもとつきあうために

#### ステップ1「考えに注目しよう」

すぐに暴力をふるったりする子は、周囲の人の行動や自分への働きかけに対して、敵意帰属をしやすいといわれています。帰属というのは、出来事の原因を何かに求める過程のことです。頑張ったから成績が上がったと考える人は、よい成績の原因を自分の努力に帰属しているといえます。人は、何か出来事が起きたとき、その原因を考え、何かに帰属させようとしています。

子どもが敵意帰属を持っている場合、例えば、授業で指名されたら、「この先生は、自分が勉強が苦手なことを知っていて、みんなの前で恥をかかせようと思って、わざと自分を指名したんだな」と考えたりします。子どもを指名するという教員の行動の背景に、自分に対する敵意（困らせよう、恥をかかせようという意図を持っている、など）があると考えてしまう傾向を持っているということです。その背後に、周囲の人は信用できない、自分を守りたいという思いが強い場合も少なくありません。

こうした子どもは、相手を信用することが難しいので、教員の側の根気強い働きかけが大切になります。すぐに返事が返ってこなくても、めげずに、あいさつを続けたり、笑顔を向けることが大切になります。教員は、期待していない子どもに対

して、見ない、ほめない、叱りやすいことが知られています。教員は、君の味方だよというメッセージを、言葉や身体表現を通して、こまめに伝えていきたいものです。

また、そうした子どもには、君とやりとりしながら一緒に勉強しようと思って指名したんだけどな、などと自分の思いを伝えたり、どうして困らせようとしてるって思ったの、とか、恥をかかせようとしていると思ったんだ、というように、子どもの気持ちをくんだり、わかろうとする関わりをすることも大切です。そうした繰り返しで、教員の意図を理解させたり、子どもに、自分の考えの癖に気づかせることも必要です。

また、暴力をふるいやすい子は、自己中心的な考え方をしやすいことも知られています。自分がしたことを、たいしたことない、みんなやってる、と言ってみたり、自分が何かしたり、変わろうとするのではなく、自分のために周囲の人が何とかすべきだと考えていることもあります。こうした言葉や思いの背景にも、自分を守りたいという思いがあると考えられます。

乱暴など不適切な行動をとった子どもに対し、ダメなものはダメということをしつかり伝えるとともに、その行動が持っている意味、例えば、暴力的なふるまいは、結局は、周囲との関係を壊していくことになることや、相手の立場に立ったら、どう感じるのかといったことなどを、問答などを通じて、自分自身で考えさせていくような時間を持つことが大切になります。

## ステップ2「気持ちに注目しましょう」

怒りをはじめ、その子どもに生じた感情はその子のものであり、怒りを感じるなと命ずることはできません。ただ、その感情が不適切な行動につながらないようにする配慮は必要です。

感情は、表出しないと、たまっていくと考えられています。話す機会を設けて、子どもの悩みや愚痴を聞きながら、それまで表出できていなかった気持ちを吐き出させることで、ガス抜きをすることも大切です。

教員から見て、好ましくない行動をしたからといっても、その行動を指導すればいいわけで、その子を見捨てることなく、上手に気持ちを聞いたり、共感しようとするその姿勢を示すことが大切です。そのことが、「この先生は、自分を見捨てない、嫌っていない、気持ちをわかろうとしている」という思いにつながり、それが、やがて、安心感や信頼関係につながっていくと考えられます。



### ステップ3「ふるまいに注目しましょう」

乱暴な子は、かっとなった時に上手にふるまえず、自他を傷つける不適切な行動をとっているとも考えられます。これまで、怒りが生じたときの適切なふるまい方を身につけておらず、誤ったふるまい方が身につけていることがあると考えられます。

そうした子は、かっとなったら、暴言や乱暴な行動などワンパターンの行動をとりやすいものです。その時の気持ちを言葉にするとか、かっとなったら十数えてみる、その場から離れてみるといった具体的な対処策を伝えておくことも必要です。より穏健な行動のバリエーションを一緒に考え、増やしていくことが大切です。

### 子どもと和やかに過ごすためのプチメッセージ

子どもの身近にいる教員は、モデリングの対象としても大きな役割を果たします。「背中を見て育つ」といわれるように、子どもは、教員の言うこともそうですが、それ以上に、教員のふるまいの影響を受け、自分のふるまい方を身につけていきます。

ちょっとした言葉がけが、一人一人の子どもにとって、自分が大切にされていると感じられるようなもの、となっているのでしょうか。他者から大切にされた子どもは、自分を大切にするようになり、やがて、周囲の人を大切にするようになります。乱暴な子どもだといって嫌ったり、関わることを億劫がったりはせず、教員は、上手なふるまい方のモデルとして、受容する者として、子どもの前に立ちたいものです。

